

「妙見信仰と八代」展の概要と見どころ

八代を代表する名所のひとつに八代神社がある。江戸時代は妙見宮と称し、今なお我々が親しみを込めて「妙見さん」と呼ぶこの神社の秋季祭礼「八代妙見祭」は、400年以上の伝統を持つ八代の宝物だ。しかし、なぜ八代で妙見信仰が発展してきたのか。実はナゾが多い。この根本的な問いに挑むのが今回の特別展だ。初公開14点を含む59の作品でお届けする。出品リストは当館HPで公開中なのでご参照されたい。

そもそも妙見とは、唯一不動の星・北極星に対する信仰をルーツとした仏教的概念だ。根本経典『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪經』によれば、妙見は万能最強の菩薩。国土の災厄邪悪を払い、衆生に吉祥長生をもたらすと説く。日本では8世紀から畿内で妙見が尊崇されはじめ、やがて現世利益をもたらす菩薩信仰として各地に広がった。

人々は何を妙見に求めたのか。興味深いのは、『日本霊異記』や『入唐求法巡礼記』などの古代文献において、当初から「海を鎮める」靈験が強調されていることだ。正確な地図も電灯もない時代、海に生きる人々が、北の夜空に輝き正確な方位を導く北極星を頼りとしたのはごく自然なこと。彼らとその神格化である妙見を尊崇したことは想像に難くない。

これをふまえて八代の歴史を見直すと、やはり「海と妙見」との密接な関係がうかがえる。17世紀後半、商売のため船で長崎に向かった八代町人井櫻屋勘七は海上で嵐に遭う。そこで勘七が妙見に祈ったところ難を逃れ、その際に獅子楽の技を伝授されたという。このエピソードは、海と港湾を生活基盤とする八代城下町の町人たちの妙見への尊崇ぶりを象徴している。こうした町人たちの篤い信仰が城下町祭礼「妙見祭」発展の原動力となったのだ。

また、八代城主松井興長は、海辺に拓いた松崎新地の鎮守として妙見を勧請し、万治元年(1658)松崎妙見宮(現松崎神社)を創建している。海の町八代に暮らす者は、統治者も町人たちも皆、妙見に「海を鎮める」靈験を求めたのだ。

江戸時代の八代妙見宮には、人々の寄進奉納によって多くの建物や仏神像が存在していた。そこには社殿のみならず神宮寺や本地堂、文殊堂などの仏教施設もあり、まさにそれは神仏習合空間。また、妙見は万能ゆえに種々の神仏に変化するとされ、それを体現するごとく、妙見菩薩に加え、阿弥陀如来、十一面観音、弁才天など様々な仏像が祀られていた。

そんな八代の妙見も順風満帆だったわけではない。明治3年(1870)政府の神仏分離政策により、元々が仏教的である妙見は排除されてしまう。神宮寺などの仏教施設はもちろん、そこで祀られていた仏像なども排除され、社名の「妙見」という文字すら失われた。

しかし、その遺品たちは、人々の変わらぬ妙見への尊崇の念により、現在まで守り伝えられている。「妙見祭」と同様、これも妙見をめぐる長く深い八代の歴史の真骨頂だ。

今回ご紹介する作品の大半は、かつて同じ八代妙見宮にいた「元同僚たち」。約150年ぶりの同窓会状態の当館は今まさに「妙見だらけ」。このレアな瞬間をお見逃しなく。

【学芸員(主幹) 鳥津亮二】



八代妙見宮一乗坊伝来の「鹿乱妙見尊像」
江戸時代(18世紀) 当館蔵
出品番号 24



亀蛇に乗る「木造弁才天坐像」
江戸時代(18世紀) 金立院蔵
出品番号 35

見えてきた八代的「妙見」のすがた

講座コラム①で述べたように、「妙見」とはもともと仏教的概念。4世紀の中国で訳出された「妙見」の根本経典『七仏八菩薩所説大陀羅尼神呪経』により、妙見はそもそも「菩薩」として位置づけられていた。よって、古代日本においても一般に「妙見」は菩薩の一種と認識され、そのイメージは他のノーマルな菩薩と同様、穏やかなものだったようだ。今回、唯一熊本県外からの出品となった平安時代の木造妙見菩薩坐像（大分県中津市本耶馬溪町青区蔵）や、本展覧会図録に図版掲載した鎌倉時代の「妙見菩薩図像」（醍醐寺蔵、展示は写真パネルのみ）に見える像容は、当初日本で受容された「妙見」イメージをうかがう上でとても貴重である。

その「妙見」のすがたが鎌倉時代以降、徐々に変容していく。妙見菩薩像の変容過程に注目した山下立氏は、平安時代（12世紀）の木造大將軍神像（大將軍八神社蔵、本展覧会図録に図版掲載、展示は写真パネルのみ）が、鎌倉時代以降の妙見菩薩の新たな造形に影響を与えたと指摘している。その新たな造形の特徴は、①被髪（髪を結わない）、②着甲、③亀蛇に乗ることだという。

※山下立「妙見菩薩の変容―千葉・個人蔵銅造妙見菩薩像懸仏の像容の検討を中心に―」

『密教図像』第18号、密教図像学会、1999年

この山下氏の指摘に注目して八代地域の妙見菩薩像をほぼ網羅的に調査研究した当館学芸員の石原浩は、本展覧会準備過程において、八代で現存している妙見菩薩画像・彫刻がおおよそこの3つの特徴を満たしていることを明らかにした。石原によると、着衣については、甲（鎧）をまとう像、唐服をまとう像、あるいは甲の上に唐服をまとう像がある。手には剣を持ち、持ち方は頭上にかざす、胸前で上向けに持つ、剣先を地に付けるパターンがある。

具体例をいくつか紹介しよう。写真右上の木造妙見菩薩立像（個人蔵）はかつて八代妙見宮の神宮寺に祀られていたもの。確かに髪を結わず垂らす、着甲姿（さらに唐服も重ね着）で剣を所持、足元には亀と蛇（玄武）。見事に先述の3つの特徴が当てはまる。本展覧会ポスターや図録表紙にお出ましいただいた、容姿端麗な木造妙見菩薩立像（植柳妙見宮蔵）も同様だ。

これらは彫像だが、絵画でも傾向は同じだ。写真右下の妙見尊像（当館蔵）も八代に伝来したもの。左手に宝珠を持ち、右手の剣は上向きなどの相違点はあるが、やはり先の3つの特徴が当てはまる。講座コラム①に掲載した鹿乱妙見尊像（当館蔵）も合致している。

残念ながら、八代地域に残る妙見菩薩像は江戸時代以降のものばかりで、中世にさかのぼる遺品は今のところ確認できていない。なので、今述べた江戸時代の八代的「妙見」の姿がどうやって形成・定着したのか、その過程解明にはまだナゾが残る。

しかし、正直に言って私自身もこれまでは「妙見さん、はガメ（亀蛇）に乗っている神様」ぐらいのざっくりしたイメージしか持っていなかった。それが、こうして作例を集めることにより、ようやく八代的「妙見」の具体像が見えてきた。大きな前進だ。

八代地域の妙見菩薩像の図版やその詳細な解説は、展覧会図録に凝縮して掲載している。ぜひ多くの方々にご覧いただきたい。そして、できればご購入いただきたい（要するに図録の宣伝です）。

【主幹（学芸員） 鳥津亮二】



妙見宮神宮寺伝来の「木造妙見菩薩立像」
江戸時代（18世紀） 個人蔵
出品番号 32



「妙見尊像」
江戸時代（18世紀） 当館蔵
出品番号 25

展覧会出品リスト

開館30周年記念 令和3年度秋季特別展覧会 八代の歴史と文化30 「妙見信仰と八代」

【★は初公開作品】

●は国指定重要文化財 ◎は各県指定文化財 ○は各市町村指定文化財を示す

No.	指定	名 称	員数	時 代	所 蔵
1		妙見宮実紀	1冊	享保15年 (1730)	個人
2	○	四寅剣【展示は当館蔵の複製品】	1口	室町時代 (16世紀)	原蔵 八代神社 (八代市)
3	◎	木造妙見菩薩坐像	1軀	平安時代 (10世紀)	本耶馬溪町青区 (大分県中津市)
4	●	妙見菩薩図像 上巻【写真パネル展示】	1巻	鎌倉時代 (13世紀)	醍醐寺 (京都市)
5	●	星曼荼羅図【写真パネル展示】	1幅	平安時代 (12世紀)	久米田寺 (大阪府岸和田市)
6	●	尊星王像【写真パネル展示】	1幅	鎌倉時代 (13世紀)	園城寺 (滋賀県大津市)
7	◎	日吉山王曼荼羅図【写真パネル展示】	1幅	南北朝時代 (14世紀)	正源寺 (滋賀県長浜市)
8		三井曼荼羅図【写真パネル展示】	1幅	江戸時代 (17世紀)	園城寺 (滋賀県大津市)
9	●	木造大將軍神像【写真パネル展示】	1軀	平安時代 (12世紀)	大將軍八神社 (京都市)
10		鎮宅靈符神像【写真パネル展示】	1幅	室町時代 (15～16世紀)	市神社 (滋賀県東近江市)
11	○	上宮出土瓦	2口	平安時代 (9～12世紀)	八代市立博物館
12		上宮罌口	1口	江戸時代 (18世紀)	八代神社 (八代市)
13		中宮井下宮願文写	1巻	江戸時代 (17世紀)	八代神社 (八代市)
14		小早川家系図 ★	1巻	文久3年 (1863)	個人
15		帆船図 ★	1枚	江戸時代 (17世紀)	個人
16		陶製十一面観音菩薩坐像懸仏 ★	1面	天文年間 (16世紀)	個人
17	○	「妙見宮」扁額	1面	安永5年 (1776)	八代神社 (八代市)
18		罌口	1口	享保10年 (1725)	医王寺 (八代市)
19	○	妙見宮社領絵図	1枚	元禄6年 (1693)	八代神社 (八代市)
20		獅子楽ノ由来	1巻	江戸～明治時代 (19世紀)	個人
21		妙見宮祭礼絵巻	1巻	江戸時代 (19世紀)	八代神社 (八代市)
22		神宮寺良如像 ★	1幅	江戸時代 (19世紀)	個人
23		神宮寺歴代住職位牌 ★	1基	明治8年 (1875)	悟真寺 (八代市)
24		籠乱妙見尊像	1幅	江戸時代 (18世紀)	八代市立博物館
25		妙見尊像	1幅	江戸時代 (18世紀)	八代市立博物館
26	◎	木造阿弥陀如来坐像	1軀	江戸時代 (17世紀)	階下釈迦堂 (八代市)
27		銅造十一面観音菩薩坐像懸仏	1軀	鎌倉時代 (13世紀)	階下釈迦堂 (八代市)
28		木造文殊菩薩坐像	1軀	寛永6年 (1629)	医王寺 (八代市)
29		木造傳大士三尊像	3軀	宝永元年 (1704)	医王寺 (八代市)
30		木造妙見菩薩立像	1軀	江戸時代 (18世紀)	医王寺 (八代市)
31		木造妙見菩薩立像	1軀	明和5年 (1768)	医王寺 (八代市)
32		木造妙見菩薩立像 ★	1軀	江戸時代 (18世紀)	個人
33		木造不動明王立像 ★	1軀	江戸時代 (17世紀)	個人
34		木造妙見菩薩立像	1軀	江戸時代 (18世紀)	金立院 (八代市)
35		木造弁才天坐像	1軀	江戸時代 (18世紀)	金立院 (八代市)
36		木造十一面観音菩薩立像 ★	1軀	天和3年 (1683)	常楽院 (宇城市)
37		木造十一面観音菩薩立像	1軀	平安時代 (10世紀)	竹原神社 (八代市)
38		木造妙見菩薩立像	1軀	江戸時代 (17世紀)	植柳妙見宮 (八代市)
39		木造妙見菩薩立像	1軀	嘉永6年 (1853)	植柳妙見宮 (八代市)
40		八代墾田記 ★	1巻	万治元年 (1658)	医王寺 (八代市)
41		八代新地鎮守木額 ★	1面	文政11年 (1828)	個人
42		妙見神像 ★	1幅	江戸時代 (17世紀)	今三宮社 (氷川町)
43		木造大摩訶首羅天立像 ★	1軀	寛文6年 (1666)	今三宮社 (氷川町)
44		木造妙見菩薩立像	1軀	江戸時代 (18世紀)	盛光寺 (八代市)
45		木造妙見菩薩立像	1軀	安政4年 (1857)	玉泉寺鎮守堂 (八代市)
46		木造天神坐像	1軀	安政4年 (1857)	玉泉寺鎮守堂 (八代市)
47		木造天照大神立像	1軀	安政4年 (1857)	玉泉寺鎮守堂 (八代市)
48		木造牛頭天王坐像	1軀	安政4年 (1857)	玉泉寺鎮守堂 (八代市)
49		木造秋葉大権現立像	1軀	安政4年 (1857)	玉泉寺鎮守堂 (八代市)
50		鎮宅靈符縁起集説	1冊	宝永5年 (1708)	八代市立博物館
51		太上秘法鎮宅靈符【写真パネル展示】	1幅	江戸時代 (19世紀)	園城寺 (滋賀県大津市)
52		正法寺釈迦如来堂再建棟札	1面	元禄17年 (1704)	階下釈迦堂 (八代市)
53	○	太上秘法鎮宅靈符 ★	1幅	江戸時代 (19世紀)	個人
54	○	太上秘法鎮宅靈符版木 ★	1組	江戸時代 (19世紀)	個人
55		銅造鎮宅靈符神像	3軀	江戸時代 (19世紀)	医王寺 (八代市)
56		鎮宅靈符神鈴	2口	江戸時代 (18～19世紀)	熊本博物館
57		鎮宅靈符神鈴	1口	江戸時代 (18～19世紀)	一般財団法人松井文庫
58		鎮宅靈符神鈴	1口	江戸時代 (18～19世紀)	個人
59		八代妙見祭の亀蛇	1基	(頭部) 明治40年 (胴体) 昭和15年	出町亀蛇保存会 (八代市)